博士学位論文審査要旨

申請者　：井上　翠
論文題目：『源平盛衰記』における物語叙述の方法
申請学位：博士（学術）
審査員　：主査　　大津雄一　　早稲田大学教育・総合科学学術院教授　博士（文学）
　　副査　　田渕句美子　早稲田大学教育・総合科学学術院教授　博士（人文科学）
　　副査　　和田琢磨　　早稲田大学文学学術院教授　博士（文学）
　　副査　　野中哲照　　国学院大学文学部教授　博士（文学）

※2020 年 6 月 6 日、Zoom による公開発表会において審査した。

１　本論文の目的

本論文は、『源平盛衰記』の文学としての再評価を試みたものであり、さらにはその古典教材としての可能性についても論じたものである。

『平家物語』の諸本は、琵琶法師の語りに基づいた「語り本系」諸本と、それ以外の、読むために作成されたと思われる「読み本系」諸本とに大別される。『源平盛衰記』は、「読み本系」の一本である。成立は室町期であろうとされるが不明である。全 48 巻で、諸本中最も記事量が多いことに特徴がある。近世においては版行を重ね、『大日本史』や『本朝通鑑』の資料として使われるなど、その資料性が重んじられ、『平家物語』（流布本）とは別個の作品として扱われていた。近代になってもこの傾向は続き、第二次世界大戦までは、教科書にも『源平盛衰記』の本文が使用されることが多かった。

しかし、異説や関連説話、故事先例話など物語の本筋からは逸脱する記事が多く、情報量は多いが衒学的であり、かえって物語の統一性や集中性を損ない散漫であるという批判が早くからあり、文学的には高く評価されることがなかった。

本論文は、従来の研究が、ややもすると『源平盛衰記』の特徴であるそれら多くの傍系記事に注目して論じる傾向があったのに対し、物語の本系ともいうべき歴史叙述のありかたに注目してその方法を解明し、『平家物語』諸本における『源平盛衰記』の存在意義を明らかにすることを第一の目的とする。

また、『源平盛衰記』の情報量の多さは漢籍の引用にもよっているが、その特質が、高等学校の古典の古文・漢文複合教材としての可能性をもたらしていることも、明らかにしようとする。

2　本論文の構成

第一部において『源平盛衰記』がどのように論じられてきたのか、その研究史を概観し、第二部において『源平盛衰記』における物語叙述の方法と物語としての特質について論じ、第三部において『源平盛衰記』の教材としての可能性を考察している。

目次は以下の通りである。

第一部　『源平盛衰記』研究史

戦前編

戦後編

第二部　『源平盛衰記』における物語叙述の方法

第一章　西光の機能

第二章　重複記事の分析

第三章　巴の物語

第四章　敦盛最期譚の可能性

第五章　小宰相の入水

第三部　『源平盛衰記』教材化論

第一章　「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開

第二章　「橋合戦」から「季札劔」への展開

3　本論文の概要

第一部　『源平盛衰記』研究史

第一部では、明治時代以降、『源平盛衰記』がどのように論じられてきたかについて、戦前編と戦後編として、それぞれ成立論と作品論に大別して以下のように検証する。

現在、読本系に分類される『源平盛衰記』は、語り本系の『平家物語』（覚一本・流布本など）とともに、近世史書においては史料として用いられていたが、その史料的価値に疑問が呈され、明治時代の半ば頃から史料ではなく文学として扱われることとなる。

まず、戦前においては、『平家物語』との先後や『源平盛衰記』成立の背景が検討されるなかで、『平家物語』諸本の系統が考察され、『源平盛衰記』は、読本系の延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』とともに論じられる一方、語り本系の『平家物語』が叙事詩として評価を受けるのに比べて、『源平盛衰記』はその文学的価値が低いものとされる傾向にある。昭和十四年には第二次世界大戦が始まり、戦時下においては武士道精神が強調される。軍記物語はこれと結びつけて論じられ、『源平盛衰記』もまた、武士道の観点から評価されることとなる。一方で、諸本や諸記録の集大成で、知識的・衒学的、あるいは注釈的・辞典的な性質や、殺伐・卑俗な面があるといった今日的な『源平盛衰記』評がすでに見受けられる。

戦後には、多彩な『平家物語』諸本の一つとして、また、そこから独立した一作品として、さらなる研究が進められる。『源平盛衰記』の成立時期や背景について、他作品との関係や、成立圏などから考察されるとともに、さまざまな資料を取り込んでいる『源平盛衰記』の出典に関する論考が多く見受けられるようになる。また、『源平盛衰記』の異常・異様な世界への関心や饒舌さの所以、教訓的な性質などとともに、『平家物語』とは異なる物語のありようの解明が進められ、『平家物語』を読みかえ、異化し、異質の世界を提示する『源平盛衰記』の特質が論じられている。

このように文学となった後も『源平盛衰記』の研究は深められてきたが、『源平盛衰記』は知識豊富ではあるものの繁雑・冗長であり、整合性や求心性を欠くといった評言が散見され、また、他の諸本にはない多くの叙述を有する『源平盛衰記』は、故事説話など所謂傍系の叙述に注目してその成立や特徴が論じられることも多い。

しかし、『源平盛衰記』が平家一門の栄枯盛衰や源平の争乱およびそれに関連した出来事をどのように描き出しているかという、本系の物語についての考察こそが最もなされるべきことではないかと指摘する。

第二部　『源平盛衰記』における物語叙述の方法

第一部で示した問題意識から、第二部では、『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察する。

第一章　西光の機能

第一章では、『源平盛衰記』において他本とは異なる位置づけとなっている清水寺炎上や殿下乗合さらには治承三年政変といった出来事について、西光に着目して読み解く。『源平盛衰記』では、平清盛と西光の対決において、「過分」であるのは清盛の方ではないかという西光の反問から、西光に対する批判は反転して清盛にも向けられるとともに、清水寺炎上や殿下乗合などの他本とは異なる位置づけにつながってゆくという工夫がなされているとする。さらに、後白河院に讒言する西光と後白河院に諫言する静憲は、いずれも清盛と対峙する人物として対照性が見出され、これまでの出来事が結びつく形で治承三年政変が描かれていることを指摘する。

さらに、『源平盛衰記』では、『愚管抄』や『玉葉』などの記録を用いて史実に近い描写がされているが、単に史実に合わせた記事となっているだけでなく、そこから殿下乗合や治承三年政変の他本とは異なる展開が生まれており、その点において、史料の取り込みもまた『源平盛衰記』の物語叙述の方法の一つと言えると論じる。

第二章　重複記事の分析

第二章では、『源平盛衰記』における行綱の密告、大場景親の早馬、一の谷の城戸口へ向かう平山季重の動向に見られる叙述の繰り返しに着目し、『源平盛衰記』の物語叙述の方

法を考察している。『平家物語』諸本には、共通して、鹿ケ谷謀議における酒宴の様子は詳細に描かれているが、『源平盛衰記』では、行綱の密告においても酒宴の様子が具体的に述べられている。また、大場早馬は『源平盛衰記』における重複記事として古くから指摘されている。さらに、『平家物語』諸本に共通して、一の谷の城戸口に至るまでの経緯を季重が語るが、『源平盛衰記』では、それに先立って季重の動向が具体的に描かれ、同内容が繰り返されている。これらの叙述の繰り返しは、一見、『源平盛衰記』の冗長さを示すものとも捉えられるが、独自の趣向が施されることによって物語世界を増幅させていると指摘する。

さまざまな資料の取り込みが、いわば『源平盛衰記』外側からの増補であるのに対して、叙述の繰り返しは『源平盛衰記』内側からの増補と言えると述べる。

第三章　巴の物語

第三章では、「木曾最期」における巴の物語の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質の解明を試みる。『源平盛衰記』では、巴が木曾義仲の「乳母子」で「妾」とされている。巴は「木曾殿の乳母子」と名乗って見事な戦いをしてみせる。巴は「乳母子」として義仲と「一所の死」を望むが、それはかなわず、義仲は乳母子である今井兼平との「一所の死」を望む。

『源平盛衰記』の巴の物語は、覚一本『平家物語』を中心とした「乳母子」今井兼平との男同士の絆を強調する「木曾最期」の物語を相対化するものとなっていると論じる。

第四章　敦盛最期譚の可能性

第四章では、敦盛最期譚の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指している。『平家物語』には「父子の物語」という一面があり、敦盛最期譚はいわばその変奏として、擬似的な「父子の物語」に数えられる。だが『源平盛衰記』では、「誰の子か」という問いと「存ズル肯（旨）」の解釈のズレから、父の位置から平敦盛を見る熊谷直実とその直実に武者として対峙する敦盛の隔たりが浮き彫りになる。それは「心通い合う二人」という読みを相対化するものとしても機能する。さらに、『源平盛衰記』では、敦盛最期譚の直後に描かれる敦盛の兄・平経正の最期が敦盛最期譚そのものを相対化するものとなっている。直実とすれ違う敦盛は「父子の物語」を相対化し、経正の物語は敦盛の物語そのものを相対化する。『源平盛衰記』は、ときに『平家物語』諸本の「物語」の枠組みをはみ出し、それを相対化する新たな「物語」を生み出していると論じる。

第五章　小宰相の入水

第五章では、『源平盛衰記』における小宰相の入水話の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指す。『源平盛衰記』では、平通盛を慕い入水へと向かう小宰相を、乳母子の女房は同じ思いで引き戻そうとする。しかし、そのような乳母子

の女房の言葉に小宰相は応じない。そして小宰相は、自身が送った歌にたがわず、二度と「カレガレに」なることのなかった通盛にどこまでも後れまいと入水する。互いの言葉が通い合う通盛と小宰相に対し、乳母子の女房は通い合うことなくひとり残される。人物間のやりとりにおける齟齬は、義仲と巴、直実と敦盛の間にも見られたものであり、その不調和から新たな物語が生まれてゆく点に、『源平盛衰記』の物語としての特質の一端が捉えられるとする。

以上、第二部では、平家一門の栄枯盛衰や源平の争乱およびそれに関連した出来事を対象として『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察している。

第三部　『源平盛衰記』教材化論

第三部では、『源平盛衰記』の特徴である傍系の叙述を活用することによってその教材としての可能性を考察する。さまざまな資料を取り込んでいる『源平盛衰記』は、他の諸本にはない多くの漢籍由来の故事説話を有しており、四十八巻に及ぶ膨大な叙述の一因となっている。それを用いることによって古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく方策を探り、古典複合教材としての可能性を論じる。

第一章　「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開

第一章では、『源平盛衰記』における会稽山の故事説話を用いて古文・漢文複合教材の可能性を考察する。

『源平盛衰記』では、「大場早馬」の後に会稽山の故事説話「勾踐夫差」が見られ、巻第二「額打論」とその報復としての「山僧焼清水寺」の後にも会稽山の故事説話「會稽山」が見られる。それらの場面を取り上げ、また、比較することによって、学習者は『源平盛衰記』という一作品のなかで故事説話がどのように用いられているかを考えることができる。そしてこの会稽山の故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」と密接な関連があり、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくことができる。古文の授業のなかで『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」、巻第二「額打論」「山僧焼清水寺」から「會稽山」を先に学習している場合には、その中国故事説話を漢文の授業のなかで捉えることができ、漢文の授業のなかで「臥薪嘗胆」を先に学習している場合には、その中国故事説話が『源平盛衰記』にどのように取り入れられているかを古文の授業のなかで捉えることができるとする。さらに、「大場早馬」から国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」へと展開することもできることを論じる。

第二章　「橋合戦」から「季札劔」への展開

第二章では、国語教科書に古文の教材として掲載されることのある『平家物語』「橋合戦」から『源平盛衰記』に見られる中国故事説話「季札劔」を用いて漢文の授業へとつなげて

ゆく国語の授業の展開について考察する。授業の実践を考慮した場合、まず、教科書に掲載されている「橋合戦」を扱い、その発展として、『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」を取り上げ、「季札劔」へと展開する方法が有用であろうと述べる。国語教科書に掲載されている「橋合戦」の冒頭は、「宮は宇治と寺との間にて、六度まで御落馬ありけり」とされており、『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」は、その以仁王の最期の場面から始まる。そして『源平盛衰記』では、「宮中流矢」の後に「季札劔」が見られる。この故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「季札挂剣」と密接な関連があり、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくことができる。実践に際して、授業時間数などを考慮した場合にも、一つの学年における古文の授業と漢文の授業を連動させた国語の授業を展開することが可能であろうと論じる。

高等学校学習指導要領（平成３０年告示）の第２章第１節国語において、第２款各科目の第２言語文化の２内容（２）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、また、古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』という一作品のなかで中国故事説話を捉えることによって、国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義について学習者の理解を深めることにも役立つであろうとする。

『源平盛衰記』は、さまざまな資料を取り込み、また、芸能との関係も指摘されるなど、相互に影響し合い、多彩な回路を持つものとなっている。その特長を用いることによって、古文の授業から多岐にわたって展開することができる教材として、『源平盛衰記』の可能性の一つがあると述べる。

４　本論文の評価

本論文は、まず、『源平盛衰記』に関する明治以降現在に至るまでの研究文献を網羅的に調査・分析し、和歌や漢籍、史料や文書、伝承、異説、故事説話といった様々な資料を取り組み、情報量は多いが、一方でそれらは煩雑、冗長との印象を与え、傍系的な叙述が、物語として整合性や求心性を損ない、文学作品としては高い評価を与えられないとするのが、一般的な認識であることを確認する。それとともに、これまでの研究が、『源平盛衰記』の特徴をなす傍系的な叙述に目を奪われがちであり、治承・寿永の内乱、源平の争乱の歴史物語・軍記物語としての本系の叙述に十分な考察が行われてこなかったことを指摘した上で、その本系の物語における独自の叙述方法について、第二部の各章で論じる。

まず第一章では、平氏打倒の最初の陰謀事件である鹿谷事件にかかわる叙述を分析し、内乱前夜の政治状況を、西光法師という一人の人物を中心として、彼と清盛などの他の人物との関係性の網の目、あるいは他の事件との関係性の網の目を独自に広げつつ、『源平盛衰記』が周到に描き出していることを指摘する。第二章では、従来同一の記事の重複で、冗長で未整理であるとされてきた記事の反復が、実は新たな物語叙述を生み出すための周

到な工夫であったことを示し、第三章では木曾義仲最期の物語、第四章では平敦盛の物語、第五章では小宰相入水の物語という、『平家物語』のよく知られた物語においても、それぞれ独自の新たな文脈が作り出され、他本のそれぞれの物語とは別の物語世界が展開されていることを明らかにした。そしてそれらは他の『平家物語』のそれぞれの物語を、あるいは我々の「常識的」な理解を相対化する力を持っていると論じる。

申請者は、その高い読解能力によって、『源平盛衰記』の物語叙述の脈絡、その方法と意義を明らかにした。これは今まで見落とされてきたことであり、『源平盛衰記』の研究に新たな局面をもたらしたものとして、評価できる。

また、第三部では、漢籍由来の故事説話を多く取り込んでいるという『源平盛衰記』の特徴が、古典教材として有益であることを論じる。平成三十年告示の「高等学校学習指導要領」では、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること」が、国語の目標の一つにあげられているが、古文・漢文複合教材としてのその有効性を指摘する。

以上、本論文は、『源平盛衰記』の文学的評価を改め、教材としてのそれも含めて、その存在意義を明らかにしたものである。

もちろん、四十八巻という大部の作品である『源平盛衰記』のすべてにわたっての読解と分析が果たされたわけではない。また、申請者の読解とは別の読解も成り立つ可能性が排除できない事例もある。さらに、本論文は主に覚一本との対比が中心であったが、延慶本、長門本など他の諸本との相違も視野に入れるべきであろう。さらなる継続的な研究が必須となる。

しかしながら、それらの課題は申請者も自覚しており、また、本論文によって示された申請者の研究能力からすれば、今後達成可能なものであると思われる。本論文が、『源平盛衰記』の研究に新たな進展を促す可能性を持つことは確かであり、その意義は決して小さくない。よって、審査員一同、本論文を博士（学術）の授与にふさわしいものと判断した。

以上